



二枚座布 団

川崎ゆきお

「昨日は何だったかなあ」

「昨日、何かありましたか」

「昨日はどんな日だったのか？」

「昨日は晴れていましたが、秋晴れです」

「ああ、そうだったねえ」

「それが何か」

「それじゃなく、昨日何をしていたのかなあ……と思い出していたんだが、思い出せん」

「じゃ、昨日の分、記憶喪失ですか」

「いや、晴れていたと言われれば、確かにそうだ。晴れていたよ。それは思い出せた。そういうどうでもいいことじゃなく、何をしていたのかだ。つまり、有為なことだ。どんな用事や、仕事をしてきたかだ」

「ああ、そういう意味ですか」

「思い出せんと言うことは、大したことはしていなかったんだらうねえ」

「でも、よくお仕事されていますよ」

「特に仕事というようなものじゃない。価値は低い」

「いえいえ」

「いつもの仕事をいつものようにする。殆ど記憶に残らないよ。三日前の仕事も、三年前の仕事も同じだ。同じ事をただ繰り返しているだけ。それじゃ、何か仕事をしたという充実感がない。昨日もそれで無駄に過ごしたような気がしてねえ」

「いえいえ、そういう蓄積が大事なんじゃないですか。一日一日は大したことなくても」

「やはり、大したことないんだ」

「いえいえ、一日一番、一番一番大切に、毎日しっかりと仕事をこなす。これだけでも大変です」

「相撲取りのようなことを言うねえ。慣れれば、どうってことはないよ。何もしていないように思えて仕方がない」

「そのうち成果が出ます」

「何十年前にもそう言われたが、何も出ん」

「明日、出るかもしれませんよ」

「いや、何も出ないまま終わっている人を多く見ておる」

「しかし、続けられることが大事だと」

「継続は力なりというのは嘘だね」

「そうなんですか」

「長く続けている人なんていくらでもいるだろ。勝負はそこじゃないんだ。飛び抜けた何かがないとね。ただ、昨日やったので、今日もできる。続けることはできる。続けるための力にはなるが、それは内側でのことで、外に対しては、そんな力はない。だから、私だけに役立つ力なんだろうけど、それを力だとは思っていない。力まなくてもできるからね。むしろ何も考えていないのに近い」

「はい」

「そうだろ、君が見ていても分かるだろ。毎日毎日同じ事の繰り返し、凡々たるものだよ。こんなこと、誰にでもできる」

「いえいえ」

「それで仕事がなくなれば、そこで消えていく。スーとね。まあ、大した存在感はないのだから、誰も消えたことに気付かなかったりするし、困る人もいない。」

「また、そんな暗い話を」

「まあ、それでも幸せな方かもしれない。こうして毎日毎日仕事ができるんだから」

「そうですよ。仕事がなくて、困っている人も多いんですから。長く続けられるだけでも御の字です」

「御の字か、どんな字だ」

「さあ、それは知りませんが」

「御が頭に来るほどありがたいということだ」

「お有り難うございましたも」

「それは重ねすぎだ。座布団を二枚敷いている人はいないだろ」

「僕、敷いています。部屋のソファの上に」

「客には二枚重ねて出さんだろ」

「さすがにそれは」

「まあ、そんな和室に客を呼ぶようなことはないし、そんな人も来ないがね。宴会なんかで、座布団が積まれておって、客が勝手にそれを使うときは、座布団を勧めたりするねえ。しかし二枚はやり過ぎだろ」

「はいはい」

「さあ、今日の仕事も、そろそろ終わりだ」

「はい、お疲れ様」

「しかし、今日、何をしたのか、明日になると忘れているだろうねえ」

「またまた」

「しかし、君と座布団の話をしたことは覚えているだろうよ」

「あ、はい」

了